

ペギー『ジャンヌ・ダルク』における悪の問題

北原, ルミ
金城学院大学 : 准教授

<https://doi.org/10.15017/1563570>

出版情報 : Stella. 34, pp.209-219, 2015-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :



ペギー『ジャンヌ・ダルク』における悪の問題

北 原 ル ミ

シャルル・ペギー没後百周年にあたる2014年、彼の『詩および演劇作品』の新版がプレイヤッド叢書より刊行された¹⁾。編者のクレール・ドーダンによれば、ペギーは戦後長い間、論争的散文では「社会主義者にしてドレフュス主義者」、詩においては「カトリックかつナショナリスト」と区別されて読まれてきたが、このたびの新版は先行する同叢書『散文全集』全3巻²⁾の成果を活かして編まれた校訂版であり、従来の区分がもはや失効したことを示す意義があるという³⁾。

たしかにペギーの詩作品の大半は、カトリックへの信仰回帰宣言となった『ジャンヌ・ダルクの愛の神秘劇 *Le Mystère de la charité de Jeanne d'Arc*』(1910年)をきっかけに奔流のごとく次々生まれており、その流れのなかでジャンヌの名は多かれ少なかれ現れ続ける⁴⁾。第1次大戦前夜におけるジャンヌ・ダルクへのペギーのこだわりが「カトリックでナショナリスト」の詩人というイメージを強めた側面はあろう⁵⁾。しかしながらペギーは19世紀末、社会主義者を標榜し始めた頃、すでに劇作品『ジャンヌ・ダルク』3部作を執筆し、社会主義系の出版社から刊行していたのである⁶⁾。1897年の刊行時、世の反応は皆無であり、上述した『ジャンヌ・ダルクの愛の神秘劇』が話題になって初めて、その「前テキスト」として3部作の方は存在を知られることになった。

『ジャンヌ・ダルク』のテーマは「悪との闘い」である。作品冒頭に掲げられた献辞は、「全世界に広がる悪への救済策をもたらさんと努め、/生き抜くだろうすべての女性諸君と男性諸君のために、/死ぬであろうすべての女性諸君と男性諸君のために」⁷⁾と始まり、その「世界中に広がる悪への救済策」は、献辞の最後で「全世界的な社会主義的共和国の建設」⁸⁾と言い換えられる。つまり現存する悪との闘いの方向性が政治的に示されているのだ。ただしペギーの考える社会主義が、今日の我々の思い浮かべるところのマルクス主義、唯物史観

をもとにした階級闘争の社会主義といかに異なるものであったかについてはすでに多くの指摘がなされてきた⁹⁾。ペギー版ジャンヌ・ダルクの闘う「悪」が、「打倒すべき支配階級」を必ずしも指すのではないとすれば、彼女は何とどのように闘うのだろうか。本論では、社会主義を前面に掲げた詩的演劇作品『ジャンヌ・ダルク』において、ペギーが「悪」の問題をいかなるかたちで提起したのかを考える¹⁰⁾。

1. 現実の悲惨

「全世界に広がる悪」は、劇の冒頭で13歳のジャネットが遭遇する戦争孤児の姿を通して表わされる。ジャネットは年下の友人オーヴィエットに次のように語る――

ついさっきもまた、子どもがふたりやってくるのが見えてね、あちらの小道をふたりきりで下ってきた。大きな方の子が小さな子の手を引いていた。ふたりして叫んでいたの、「おなかすいたよ、おなかすいたよ、おなかすいたよ」って。ここからでも聞こえたわ。私の食べ物をつたりにあげた。ふたりとも獣みたいに飛び付いた。そうしたら、ふたりの喜びように胸が痛んだの、だって突然、ふっと、食べることもできないで飢えに苦しむ他の人たちみんなのことが頭をよぎって。慰められることのない不幸な人たちみんなのことを思ってしまった。慰められるなんてごめんだという人たちのことを思ってしまった。それで泣きそうになるのを感じて。だから顔を背けたの、ふたりを悲しませたくなかったから、少なくともこの子たちは。

(短い沈黙)

私はふたりに私のパンをあげた。そんなことをしたって！ ふたりは今晚になったらひもじいでしょう、明日になったらひもじいでしょう。[…]

ふたりとも、ひもじい道、また歩いていった。私たちが少しばかり努力した所で何になるでしょう。私たちの施しが何になるでしょう。それでも、父さんのパンを全部、通る人たちに食べさせることなどできないわ。できたとしても、飢えに苦しむ大勢の人たちのなかで、そんなちっぽけなパンが見えるのかしら。¹¹⁾

飢えた子どもにパンを恵む場面といえ、ボードレールの有名な散文詩「菓子」(1862年)¹²⁾が想起されよう。ボードレールは、施されたパンを激しく奪い合うふたりの子どもの姿によって、無垢であるはずの子どもをすら汚染する「原罪」を暴き、ルソーの説く「人間の生来の善性」を否定したのだ¹³⁾。人間の本性に刻まれた原罪によって生み出される「悪」をボードレールが提示した

とするなら、ペギーがここで提示する「悪」は、「獣のように」パンに飛びつく子どもたちの本性にあるわけではない。子どもたちを苦しめる状況、つまり戦争状態にある社会の悲惨こそが「悪」なのである。「悪」を前に施し（慈善）がまったく無益であるとの意識はボードレールと共通している。ただしボードレールの場合、取っ組み合いによりパンを粉々にして無駄にする子どもたちの側が問題（人間性の醜悪）であるのに対し、ペギーの場合、施しのパンがささやかすぎて子どもの日々の糧となるに足りず、また飢えた者の膨大な群れに対しては著しく不足していることが問題視されている。ここでのパンが、物質的な食料だけを意味するわけではないことは、飢えた人々が「慰められることのない不幸な人たち」「慰められるなんてごめんだという人たち」と言い換えられていくところからも推測できよう。「父さんのパン」、すなわち父なる神の与える恵みが不幸な人々の元にまったく届かず、行き渡らない状況があり、それゆえ恵みを拒絶するほどの絶望が社会を覆っていると読めるのである。

2. 「悪」の責任の所在

物質的・精神的なパンの施しが機能しない現実の社会の悲惨、この「悪」の責任は、どこにあるのか。ジャネットは年長の修道女ジェルヴェーズを通して神に問いかけようとする。「ジェルヴェーズ様は修道院にいらっしゃる。なぜ神さまはこんなにも多くの苦しみをお認めなのか、ジェルヴェーズ様ならご存じのはず」¹⁴⁾。「なぜ神さまがよいお祈りをかなえて下さらないのか、ジェルヴェーズ様ならご存じのはず」¹⁵⁾。

抽象的な善・悪の観念ではなく、現実の悲惨、癒されない不幸に苦しむ人々の存在こそが問いの出発点にある点では、ヴォルテールの「リスボンの災禍についての詩」(1756年)¹⁶⁾の系譜に連なろう。ただし、ジャネットはすべてを神の責任に帰して人間を一方的な犠牲者とする見方は取らない。戦争を行う主体が人間であるだけでなく、戦争状態を放置する社会、言い換えれば悲惨を生み出す不正な社会システムを受け入れている人間全体こそ、悪の当事者であるという意識がジェルヴェーズとの対話において明確にされる――

ジャネット：おわかりですか、ジェルヴェーズさま、私たちは、こうしたことすべてが目の前で起こるのを見ておりながら、今この時も無駄な施しのほかは何もせず、

戦争の息の根を止めようとしないうちに私たちは、こうしたことすべてに加担している、と。兵隊たちにしたい放題させている私たち、その私たちも皆、人々の身体を痛めつける者、人々の魂を滅ぼす者にほかならない、と。

ジェルヴェーズ修道女：分かっていますよ、あなたたちは、あなたたち皆人々の魂を滅ぼす者たちなのだと。それに分かっていますよ、あなたの魂は、全世界に広がる悪に己が加担していると知って、死ぬほど苦しんでいることを。あなたは絶望的なまでに自分を卑怯だと感じているのですね。¹⁷⁾

己自身も、自分の愛する家族、友人、隣人、誰もが皆、悪と無縁ではない。悪を望まずとも、何もしないことによって悪を生み出す当事者となるのである。そしてまた「悪」はここではっきりと、飢えという身体的・物質的な様相においてのみならず、「魂の滅び」すなわち絶望という精神的な様相に踏み込んで捉えられる。

3. 飛躍（「問い－祈り」から「答え－行動」へ）

身体と魂の二重の破滅を表わすのは、「地獄」という宗教的な表象である。ジャンネットによる悪の当事者性の追及は、自らの地獄堕ちを願うところにまで行きつく――

ああ、もし仮に、永遠に燃える炎から
地獄に堕ちた死者たちの、苦しみのたうつ身体を救うため、
私のこの身を、永遠に燃える炎へと、投げ捨てねばならぬなら、
神よ、私のこの身を永遠の燃える炎に、お与えください。

（沈黙）

そしてまた、もし神の永遠の不在から
地獄に堕ちた死者たちの、神の不在に狂乱する魂を救うため、
私自身の魂を、神の永遠の不在へと、投げ捨てねばならぬなら、
私自身の魂を、神の永遠の不在のなかに、行かせて下さい。¹⁸⁾

ベギー自身は子どもの頃に洗礼を受けたものの、執筆当時は無神論の立場を取っていた。彼はカトリックから離れた理由として、永久に救われない者たちがいるとする「地獄」の教義への強い反発があったことを後になって明かしている¹⁹⁾。まさにジャンヌのこの祈りは、地獄の教義に対する、また裁きを下す神に対する挑戦と受けとられかねない。「地獄に堕ちる者たちのことを考えると、私の魂は反抗するのです」²⁰⁾と彼女が神に訴えるのに対し、ジェルヴェー

ズや神学者たちはジャンヌの傲慢を責めることになる。

ところで、ジャンヌの台詞は宗教的次元と社会主義的次元の二重性を帯びている。この二重性こそがペギーの社会主義を、唯物史観にもとづく階級闘争を説く社会主義から明瞭に区別する特徴であろう。とりわけ「地獄へ堕ちる / 劫罰を受ける者 damnés」の語は、社会主義者にとっては「インターナショナル」の慣れ親しんだ歌詞「立て！ 地上の呪われし者たちよ…… Debout ! les damnés de la terre…」によって「社会より疎外された者たち、プロレタリアート」を意味する。ここからジャンヌの言葉は、社会主義的な連帯の思想を表わすといえる²¹⁾。だが同時に、悪の当事者として自分が地獄へ堕ちねばならぬという宗教的思想の発現そのものであることには変りない。

ジャンヌのこの台詞は神への問いを含む絶望的な祈りであり、歴史上のジャンヌが聞いたとされる声、つまりフランスを救うよう彼女に使命を授けた例の「声」は、まさしく必死の祈りが導き出した答えであったとペギーは解釈した。戦争状態にある社会を変えるため、戦争を終わらせるために自分が軍隊を率いること、それがジャンヌの使命であり、ペギーのいう「悪との闘い」は、史実に即したイギリス軍との戦闘の場において形象化されることになる。

ジャンヌが使命を行動に移すとき、ふたたび二重の解釈が与えられる。その行動は、神の意志であると同時に彼女の自由意思によるものとして描かれるのだ。行動を命ずる聖女たちの「声」は、彼女の台詞を通してたしかに再現される——「あなた方は忘れ難いお声で私にこうおっしゃいました、〈ジャンヌよ、今や神がそなたを選んだ。神の愛する王国よりイギリス人を追い出すがよい〉と」²²⁾。しかし同時に、「私が自分ひとりで決めたのです、だからすべてを私が引き受けます」²³⁾、「私に強い意志が湧いたのは昨日の朝のことでした。何もかも、行いう意志が湧きました。私は決心したのです」²⁴⁾と、自らの行動について全責任を負わんとするジャンヌの言葉がより強調されていることは否めない。

4. 行動における「悪」のアポリア

では、実際の行動の場面において、ペギーのジャンヌに何が起きるだろうか。ジャンヌ・ダルクを主人公とする数多くの文学で、一般に華やかに描かれるその勝利や栄光の場は、ペギーの劇においてはほとんど現れない。戦場で勝利が得られても、むしろ悪の問題は深刻化する。近くの村で老若男女虐殺の報告

を受けた彼女が、イギリス人への怒りを露わにするや、フランスの武将ジル・ド・レが次のような台詞を放つ――

ジル・ド・レ：おっと！間違っておいでですよ、ジャンヌ殿。それはフランス人たちの仕業なのでね。[...] イギリス人ならやみくもに荒れ狂ったりはしなかったでしょうな。それほど愚かではなかったでしょうよ。まず女を殺す所から始めたりはしなかったでしょう。殺してしまったら使い物になりませんからね。

(一考したのち)

ということは、女は死んだ後もまだ使い道があるということか、ただそれには……²⁵⁾

戦場における敵、イギリス人が「悪」を象徴するのではない。ジル・ド・レという伝説的人物の登場により、ジャンヌの悪との闘いが別次元にあるのは明らかだ。彼女を深く傷つけるのは、自覚的に悪の悦びを語る人物と自分が連帯しているという意識にほかならない。ジル・ド・レほどの自覚はないにしても、戦いが続くなか味方の兵士たちは彼女が軍隊にもたらした敬虔さに飽き始め、ふたたび略奪やその他の蛮行に舞い戻る。これらの兵士たちの行いすべてが悪に直結するのである――

ラウール・ド・ゴークール：男どもなど、つまらぬ存在ですよ、ジャンヌ殿。男どもは神を信じやしません。男どもは残酷で、人のものを奪い、盗人で嘘つきです。たらふく食べるのが好きで。悲しいかな、そんなものです。50年もの間私は連中とともに人生を過ごしてきたが、連中はずっとそんな調子でしたよ。

ジャンヌ：閣下、男たちはそのような存在なのでしょう。しかし私たちは、私たちの方は考えねばなりません、私たちがどうあるべきかをです。²⁶⁾

現実の人間の獣性を前にしたとき、原罪ゆえにしかたないと悲観主義に陥るのではなく、ジャンヌは悪の当事者として人間各自の責任、モラルをあくまで問おうとする。しかしながら、人間の獣性を発揮させる戦争を自分が率いている事実、すなわち悪との闘いというかたちをとって悪を生み出している矛盾に直面し、彼女は疑い、苦悩し、疲弊していく。ジル・ド・レが兵士の物質的欲求を煽れば勝ち戦になると述べると、そのような勝ち方によるぐらいならば、むしろフランスは救われないほうがよいと彼女は言い放つ²⁷⁾。

しかしジャンヌが最大の危機に瀕するのは、血塗られた戦場ではなく、自らを被告とする異端裁判のさなかである。ドンレミ村では自らを地獄へ投げ込んでほしいとまで願った彼女だったが、裁判官たちの代表する教会によって己の

傲慢を糾弾され、ついに地獄堕ちを宣告されたとき、もはや神に祈ることもできず、導きの「声」も聞こえなくなるほどの深い絶望に沈んでしまう——

ああ、ジェルヴェーズさま、
私自身が身を滅ぼしても誰ひとり救えないのだと、
私が滅ぼすだけの者であり、誰ひとり救えぬ者だと、
考えてみるだけでも……

その地獄へ私は行くのですね、純白の愛徳が
永久に汚されているあの場所へ。ああ、狂いそう……
[…]

そして私はそこへ行くのでしょうか、
希望という望みすら決して得られぬままに、
苦しむ者のただのひとりの苦痛も和らげられずに、
神なき不幸の内にあるただひとりをも慰めることなしに、

ああ、私はただのひとりをも慰められず、
自分のすべてを捨てても何の役にも立たず、
あの人たちには何の意味もないのでしょうか。²⁸⁾

自己の内なる悪の認識、すなわち悪についての当事者意識はまったく無益であり、誰ひとりとして救済しえない。自分はただ悪をなただけであるのみか、より多くの者を滅ぼすような大いなる悪を犯してしまったのではないかとの煩悶は、行動における悪の矛盾が必然的に行きつく最大のアポリアであった。

5. 神への嘆願（「答え－祈り」）

処刑直前のジャンヌの台詞は神への祈りで終わる。その祈りは、上述した絶望の問いかけ、「自分のすべてを捨てても誰の役にも立たないのか、何の意味もないのか」に対する答えとして導き出された——

神よ […]
私をお赦し下さい、私たち皆をお赦し下さい、
あなたにお仕えしながら私の犯してしまったあらゆる悪をお赦し下さい。

ですが、私には分かっています、あなたにお仕えしてよかったのだと。

私たちはあなたにこのようにお仕えてよかったのです。

私を導いたあの「声」は、私を欺いてはいなかった。

それでも、神よ、だからこそ、私たち皆をどうにかして救いたまえ、神よ。

イエスさま、どうか私たち皆に永遠の命をお与え下さい。

(ジャンヌ退場)²⁹⁾

己だけではなく、自らを含む皆の救いを乞うことで、無意味・無益の絶望から救われ、皆の救いをも嘆願することができたのである。祈りと嘆願の対象としての神をジャンヌが死の間にふたたび見出して劇は閉じる。当時無神論者であったペギーが神への嘆願で結末を締めくくらざるをえなかったのは、史実のジャンヌの抱いていた信仰心を尊重したというだけでなく³⁰⁾、劇の冒頭で彼女が神に問いかけ、祈る設定にしていたからである。彼女の悪との闘いは、悪と慣れ合ったり、これを正当化したりせず、悪を悪として見据え、たえず祈り苦しみながら行われねばならなかった。この第3部「ルーアン」自体を裁判記録に依存しすぎていて独創性がないと否定的にとらえ、ジャンヌの最期の祈りにほとんど意味を見出さない論者もいるが³¹⁾、作品全体の構造において「悪」をめぐる問いかけと答えが緊密に関連した帰結として、この祈りに至ったと我々は考える。

もちろん、祈りをもってすべてが解決されるわけではない。祈りは新たなる問いかけにすぎない。問いかけを残したまま、ジャンヌは姿を消す。「ジャンヌ退場」とのト書きには、彼女の後に別の誰かの入ってくる余地が残されており、継続される悪との闘いにおいて彼女を受け継ぐ人間がいるはずだ、いてほしいとの願いが見てとれる。作品冒頭の献辞が「望む者が誰でも、今こそこの献辞を分かち合はんことを」³²⁾と締めくくられていたのを思い起こすならば、神への祈りと人間への呼びかけとの二重性をここに再び読むことができるだろう。

1897年の『ジャンヌ・ダルク』で闘うべき対象として措定された「悪」は、物質・精神両面における現実の悲惨、社会悪であると同時に、そのような社会を成り立たしめている人間一人ひとりの悪であり、またこれと闘うなかでさらに生み出される悪であった。放置しても闘っても抜けだせない悪が偏在する世界において、自らが悪の当事者であるとの自覚をもち、皆の救済のために身を

投げ出すことができるか否かをベギーは問うたのである。同作を書き終えた直後、作家はドレフュス裁判の不正を糾弾する運動に身を投じる。この時ベギーを突き動かしたものの、後に彼がドレフュス派の「神秘」と呼ぶものは³³⁾、ジャンヌの原動力となんら変わりがない。すなわち、自らが眼前の悪の当事者であるという意識であり、皆の救済への熾烈な願いである。そういった意味においても、この『ジャンヌ・ダルク』3部作こそがベギーの文学活動の原点だったことはもはや疑いを容れまい。

註

- 1) Charles PÉGUY, *Œuvres poétiques et dramatiques*, éd. sous la direction de Claire DAUDIN, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2014. 以下 *EPD* と略記。
- 2) Charles PÉGUY, *Œuvres en prose complètes, I*, éd. par Robert BURAC, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1987. 同じビュラックの校訂により第2巻は1988年に、第3巻は1992年に刊行された。以下、各巻を *EPD I, II, III* と略記。
- 3) Claire DAUDIN, «Les enjeux d'une nouvelle édition de l'œuvre poétique de Péguy», *Europe*, 92^e année, n° 1024-1025, août-septembre 2014, pp. 158-165.
- 4) *Le Porche du mystère de la deuxième vertu* (1911), *Le Mystère des saints Innocents* (1912), *La Tapisserie de sainte Geneviève et de Jeanne d'Arc* (1912), *La Tapisserie de Notre Dame* (1913), *Ève* (1913), etc.
- 5) バレスやモーラス一派がこの作品をベギーの「転向宣言」として評価したことが大きい。それに加えて、19世紀後半から20世紀前半にかけてのジャンヌ・ダルク表象の政治的位置づけの変遷も関与している。ミシュレ以降の共和派が熱狂的に賛美していたジャンヌ・ダルクを、王党派・カトリックが自分たちの側に引き寄せ始めていた。列福にむけた動きの高まる1890年代以降、左派はジャンヌに距離を取り始める (voir Gerd KRUMEICH, *Jeanne d'Arc à travers l'Histoire*, traduit de l'allemand par José MÉLY, Marie-Hélène PATEAU et Lisette ROSENFELD, Paris : Albin Michel, 1993, surtout le chap. V : «Jeanne d'Arc dans la querelle des "deux France" jusqu'à la Première Guerre mondiale», pp. 177-244)。なお、ベギーの社会主義に大きな影響を与えたリュシアン・エールは、ジャンヌを自陣営に取り込もうとするカトリック側の動きに強く抗議した (voir Lucien HERR, «Notre Jeanne d'Arc» [14 mai 1890], dans *Choix d'écrits, I : Politique*, Paris : L'Harmattan, coll. «Les Introuvables», 1994, pp. 8-11)。

- 6) 全体を通して 24 幕ある 3 部作（「ドンレミにて *À Domrémy*」[「いくつもの闘い *Les Batailles*」[ルーアン *Rouen*]]）。ジョルジュ・ルナールを編集長とする『ラ・ルヴュ・ソシアリスト』出版から 2,000 部刊行したが、ほとんど売れ残った。なお、ペギーがジャンヌ・ダルクについての歴史文献を丹念に読み始めたのは、社会主義者となる以前のサント＝バルブ校時代にまでさかのぼる（voir Jean ONIMUS, «Les sources de la “Jeanne d’Arc” de Péguy», *Revue d’Histoire littéraire de la France*, 62^e année, n° 3, 1962, pp. 381-399）。
- 7) *EPD*, p. 3. 以下も引用はすべて拙訳。
- 8) *Ibid.*, p. 4.
- 9) 大野一道『「民衆」の発見——ミシュレからペギーへ』, 藤原書店, 2011 年（第 11 章「シャルル・ペギーと社会主義」, 293-316 頁）など。
- 10) なお本稿は, 2015 年度日本フランス語フランス文学会秋季大会におけるワークショップ「文学と悪とモラル」のための口頭発表原稿を書き改めたものである。
- 11) *EPD*, pp. 8-9 (*À Domrémy*, I^{ère} partie, 1^{er} acte).
- 12) Charles BAUDELAIRE, «Le Gâteau», *Petits Poèmes en prose (Le Spleen de Paris)*, éd. Henri LEMAÎTRE, Paris : Garnier Frères, 1962, pp. 76-79.
- 13) 海老根龍之介「シャルル・ボードレールにおける『悪』の問題」, 『アウリオン叢書 15 文学と悪』, 弘学社, 63-75 頁。宮本陽子は「施しの不可能性」を示すエピソードとして捉える（宮本『近代における幸福の分配——ルソーからボードレールまで』, 英宝社, 2015 年, 175-176 頁）。
- 14) *EPD*, p. 9 (*À Domrémy*, I^{ère} partie, 1^{er} acte).
- 15) *Ibid.*, p. 11.
- 16) VOLTAIRE, «Poème sur le désastre de Lisbonne», *Mélanges*, éd. Jacques VAN DEN HEUVEL, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», pp. 301-309.
- 17) *EPD*, p. 14 (*À Domrémy*, I^{ère} partie, 2^{ème} acte).
- 18) *Ibid.*, p. 16.
- 19) «Toujours de la grippe» [Cahiers, I, VII, du 5 avril 1900], *ÆPC I*, pp. 464-465.
- 20) *EPD*, p. 21. ヴェツセルマンは, ペギーによるジャンヌ解釈の独自性は, まさに「悪との闘い」と「地獄への反逆精神」にあるとする（voir Romain VAISSERMANN, «Notice», *ibid.*, pp. 1541-1561）。
- 21) 「ポチエ作の『インターナショナル』は, 民衆がこれまでに歌った革命讃歌のなかで最も美しいもののひとつであり, 今後もそうあろう」（«Le “Triomphe de la République”» [Cahiers, I, I, du 5 janvier 1900], *ÆPC I*, p. 316）; 「我々は地上の呪われし者たちと連帯しているのだから […] 永劫に呪われし者たちとも連帯しているのだ」（«Toujours de la grippe», *ibid.*, pp. 464-465）。ただし後にペギーは, 権威的な歌と化した「インターナショナル」を皮肉のようになる（voir «Reprise politique parlementaire» [Cahiers, IV, XX, du 16 juin 1903], *ÆPC I*, p. 1150）。
- 22) *EPD*, p. 30 (*À Domrémy*, I^{ère} partie, 5^{ème} acte).

- 23) *Ibid.*, p. 56 (*À Domrémy*, II^{ème} partie, 3^{ème} acte).
- 24) *Ibid.*, p. 58 (*À Domrémy*, II^{ème} partie, 3^{ème} acte).
- 25) *Ibid.*, pp. 135-136 (*Les Batailles*, II^{ème} partie, 1^{er} acte).
- 26) *Ibid.*, p. 149 (*Les Batailles*, II^{ème} partie, 2^{ème} acte).
- 27) このジャンヌの姿勢はそのまま、モラルなき革命を拒んだ社会主義者ベギーのものでもあった——「社会革命は道徳的なものとなろう、さもなくば存在しないだろう」(«Cahier d'Annonces» [Cahiers, II, X, 4 avril 1901], *EPC I*, p. 729)。
- 28) *EPD*, pp. 285-286 (*Rouen*, I^{ère} partie, 2^{ème} acte).
- 29) *Ibid.*, p. 299 (*Rouen*, II^{ème} partie, en un acte).
- 30) 「反教権主義的ノルマリ안의ベギーは自作の主人公ジャンヌにみずからを重ね、己が捨てたキリスト教の言語を彼女から自在に借用するが、その言語によって、己の思いもよらぬ方向へ導かれることになろう」(Simone FRAISSE, *Péguy*, Paris : Éd. du Seuil, coll. «Écrivains de toujours», 1979, p. 23)。
- 31) Voir, par exemple, Eugène VAN ITTERBEEK, *Socialisme et poésie chez Péguy : de la « Jeanne d'Arc » à l'Affaire Dreyfus*, Paris : *Cahiers de l'Amitié Charles Péguy*, 1966, pp. 142-143. しかし、たとえばドーダンはジャンヌ最期の祈りに「ついに得られた信仰」を聴き取っている (voir Claire DAUDIN, «Les voix de Dieu dans la Jeanne d'Arc de 1897», *Bulletin d'informations et de recherches, l'Amitié Charles Péguy*, n° 21, 1998, pp. 101-112)。
- 32) *EPD*, p. 4.
- 33) *Notre Jeunesse* [Cahiers, XI, XII du 17 juillet 1910], *EPC III*, pp. 5-159.